中野重治の日記

竹内　栄美子

一　はじめに

昭和文学を代表する作家のひとりである中野重治は、合計二十八年分の日記を残している。「転向」直後の一九三四年、戦時下の四一年から四五年、戦後の五三年から五七年および六三年以降亡くなる七九年までである。そのうち、四五年までの六年分は『敗戦前日記』（松下裕校訂、竹内栄美子注釈、一九九四年一月、中央公論社）としてまとまり、残りの戦後の部分は、現在、共同研究において本文確定の作業と同時に註作成の作業を行っている。中野の日記には、社会的事象に対する覚え書きをはじめとして、身近な日常のひとこまや家庭生活の様子、また購入読了した書物のリストなど多岐にわたる内容が見られるが、それらの記述を追っていくと、この文学者の思考方法や歴史認識の基底にあったものがうかがえる。さらに、断片的記述にすぎない日記の叙述を再構成していく作業は、読み手の経験していない過去の様相を立体的に浮かび上がらせ、生き生きとした同時代の考証再現を可能にする。日記を読むという行為は、読み手が書き手の経験に参入し同時代への眼差しを獲得することにほかならないが、この報告では、「転向」直後の日記記述をもとにして、プロレタリア文学運動解体期である一九三四年ごろの状況に対する中野重治の認識を明らかにしたい。

二　自己告白としての日記ではない『敗戦前日記』

ここで取り上げるのは、戦後の日記を除くすでに本文の確定された『敗戦前日記』である。この日記に関して、かつて小田切秀雄は「転向」後の保護観察処分に付されていた中野が日記を残していると知って驚いたと語り、次のようなことを述べている。

> わたしは中野に、自分が学生運動以来警察の要視察人になっているということははじめから話してあったし、会話のなかで魂までは、また批評の眼だけは、とにかく屈しきってはいないということがすぐ明らかになっていたから、中野としては日記のなかからわたしの名は厳密に省いていたのであり、わずかに一九四三年三月二一日に“O君出征につき来訪。酒一升いただくは恐縮。別杯をくんでかたる”としてだけ出てくる。その前日の二〇日、戦死をほぼ覚悟していたわたしは、仲間の佐々木基一、荒正人を中野と引きあわせておきたいと考え、中野宅に連れていったのだったが、そのときのこともこの日記には省かれているし、その翌日の“別杯”にしても、これは中野が自分のところで別れの食事をしたいから来てくれ、というのでわたしは招かれたのであり、その時彼はあたかもわたしへのはなむけでもあるかのように、獄中の宮本顕治にたいする深い信頼を語り、中野がなお立っている思想の系列を明らかにし、それは文字通りにわたしにとってこれ以上にないはなむけとなったのであった（この前後のことはわたしの『昭和の思想と文学の五十年』にややくわしく書いた。宮本へのその多年にわたる信頼が、『甲乙丙丁』では！）。わたしにとってはめったにない感動の一夜だったその時のことが、この日記では実にさりげなく御時勢向きに出征者を送る別杯とされている。（小田切秀雄「『敗戦前日記』の中野重治」、「梨の花通信」第一号、一九九一年十

月）

出征前の小田切秀雄が中野を訪問した当日の日記の全文は「北海道おばあちやん来る。卯女よろこぶ。卯女今日から起きる。O君出征につき来訪。酒一升いただくは恐縮。別杯をくんでかたる。」（一九四三年三月二十一日『敗戦前日記』）である。「北海道おばあちやん」とは小林多喜二の母小林せきのことであり、「卯女今日から起きる」とはしばらくの間病気で寝ていた中野夫妻の一人娘卯女がこの日に起きられるようになったということである。「O君出征につき来訪。酒一升いただくは恐縮。別杯をくんでかたる」と、中野は小田切秀雄の名をふせて事実のみを記載しているが、実際には先の引用文のように、中野は小田切に向かって自分の思想的立場を語っていた。

このように、『敗戦前日記』は、若干の例外はあるものの、特に一九四一年以降の記述ではほとんどを事実の次元で記載し、中野自身の判断や批判を交えないような書き方になっている。つまり、『敗戦前日記』は、著者の置かれた特殊な事情から、そこでの記述には或る制限があり、時局への批判的言辞や、友人との議論における率直な意見など、自分の思想的立場を表明する記述はほとんど見られないかたちをとりながら、他方では事実のみの記述にとどまらない豊かな背景が確かにあった、ということだ。その意味で、『敗戦前日記』は、自己の心情を直接的に吐露する告白的な日記とは全く異なる日記といえるだろう。

たとえば、樋口一葉の日記には「われは女なりけるものを」と女性でありながら物書きである自己存在に対する内省が見られるし、永井荷風の『断腸亭日乗』にはあくまで「個人」であることにこだわり続けた荷風自身の批判精神がよく発揮されている。また、遠く遡れば、平安朝の女性たちが書き残した日記文学を想起してもいい。「日記文学」という「文学」を付与した名称には、日記という記述形態が自己の心情を誰にも見られないところで正直にしたためるものであるという、自己告白的な一人称で語る私小説的側面があり、それはセルフ・リフレクションつまり「自照」としての自己省察的な側面を持っている。

しかし、中野の『敗戦前日記』は、そのような心情の吐露の見られない、ほとんどが断片的な事実の集積である。その点に関して、いくつかの日記の太平洋戦争開戦時記事を見ながら確認したい。

晴―時々雨
中島氏来り、流しの棚その他、雪垣等の破損。
アメリカと交戦の報あり。丸岡駅で新聞の貼紙を見る。英米に宣戦。ホノルル、マレー半島襲撃の報。
夜善教寺お経よみに来る。米の帳簿整理終。（中野重治『敗戦前日記』）

自分はハワイ空襲はよくやったと思いうれしくなる。大変な損害をこちらも受けたろう。新聞に「日本軍は三時間も空襲を続け、大損害を受けたが、まだハワイの制海空権はこちらにある」と言っている。自分の要サイのことを何言うかという気持。ハワイで落ちた人たち、死に甲斐あらん。（中略）感想――我々は白人の第一級者と戦う外、世界一流人の自覚に立てない宿命を持っている。はじめに日本と日本人の姿の一つ一つの意味が現実感と限ないいとおしさで自分にわかって来た。今度の

戦争の予想が色々とあったが、ハワイをまさか襲うとは思われなかった。シンガポールあたりは防空壕などあり、準備していたらしいが、ハワイだけは我々も意外であり、米人も予想しなかったのであろう。(伊藤整『太平洋戦争日記』)

晴、さほど寒からず
八時半病院に出づ。「皮膚病の予防」を書く。午食やぶそば
一時少し前春日町の電話器械ラヂオ屋にてひるのラヂオ聞く。(中略)
午前七時ラヂオにて英米に対する開戦布告のニユウス。心持頗る緊張す。
ハワイ、フィリッピン、グアム等の襲撃の報有り。夜にはまた友好の下に泰国通過の約成るのラヂオあり。(木下杢太郎『木下杢太郎日記』)

八日(月曜)。連日の疲れが一時に出た感じ。昼近く、洗濯屋の話で、京子に起こされ、対米英開戦を知る。すっかり眠気がさめて、ラジオの前に家中で集まる。女中が縁談で福島に帰っているので、母と妻と三人。ハワイやマレー半島で、戦闘がはじまっている。一瞬、覚えのあるヨーロッパ人やアメリカ人の顔が目の前を流れたが、すぐに消える。まず、何を考えるべきかに少し迷う。日記をつけはじめることをすぐに考えた。(中略)
晴れた空を見上げる。やはり、「空」の性格が一変した感じだ。すぐにラジオの戦況にかじりつく。ハワイで、アメリカの戦艦二隻を沈め、四隻を大破させたという。大きな戦果だ。ふと、戦艦一隻の建造に要する技術と、労力との大きさが、一瞬頭をかすめる。ぼくが宗教的人生観と無関係なのは幸いだった。(中島健蔵『回想の文学』)

これらの記述を比較すると、中野日記には「アメリカと交戦の報あり。丸岡駅で新聞の貼紙を見る。英米に宣戦。ホノルル、マレー半島襲撃の報」とのみ書かれていて、日米開戦に対する感想は全く見られない。それに対して伊藤整の日記には開戦の勝利に興奮する伊藤自身の感想が如実に語られている。紀田順一郎『日記の虚実』(一九九五年一月、筑摩文庫)では、多くの文学者が開戦を契機として日記を書き始めることに注目しているが、伊藤整の日記については「十二月八日を境に訪れたいわゆる“非常時”が、単なる状況の変化にとどまらず、退屈な日常の風景が相貌を一変し、かつて見たことのない高貴な輝きを帯びはじめる事情」を指摘している。同じことは、中島健蔵の『回想の文学』にも言えるだろう。一方、杢太郎は日々の仕事の記述のほかに「心持頗る緊張す」とただ一言、感想を書きつけている。中野は、このとき故郷の福井に帰っていて東京にいなかったので、伊藤整や中島健蔵とは状況が異なっていたわけだが、その記述には大きな差が見られる。

三 断片と断片との空隙を埋める作業

このような断片的事実の記載としての『敗戦前日記』を読むときに必要になるのは、その断片と断片との空隙を埋める作業だろう。注釈はその基礎作業になるが、そのような作業を通じて、私は以前に戦時下の中野が幕末から明治にかけて活躍した人々の著作を読んでいたことに注目し、当時の中野は日本の「近代化」を再検討するために関連の書籍を数多く蒐集していたのだと考えたことがある。

たとえば日記のなかには、栗本鋤雲、川路聖謨、橋本左内、渡辺崋山といった人たちの著作が脈絡もなく記されているが、それらの著作と中野が当時執筆していた森鷗外論とを関係づけて、中野の「日本近代化」に対する意識を考察し、中野における「近代日本国家成立への視角」をコスモポリタニズムとエスニシティの併存という観点から論じたのである（拙著『中野重治〈書く〉ことの倫理』一九九八年十一月、エディトリアルデザイン研究所刊）。

これは、一例にすぎないが、空隙を埋める作業を行うさいに注意しなければならないことは、解釈する読み手の意図のままにその空隙を都合よく埋めてはならないということだろう。他の文献との照合や聞き書きによる調査などを踏まえたうえでじゅうぶんに吟味しながら全体を再構成することで、書き手の経験を読み手も改めてたどることができるのだと思われる。一人称で叙述された日記の書き手の経験・記憶を、読み手も辿りながらその経験・記憶に参入して過去の再構成を行う、つまり書き手の経験を読み手も共有するという行為は、そのような空隙を埋める作業によって可能になる。その意味で、記憶の表象の一ジャンルとしての日記を読む作業は、言語表象の解釈だけにとどまらない、時代の再構成という大きな意味を持つだろうと考えられる。

さて、以下に取り上げるのは、中野の「転向」後の日記記述である。この出獄後の日記では、妻との関係がぎくしゃくして別居せざるを得ず、離婚の危機があったことなどのほかに、特に注目されるのは、中野自身が獄中にいるあいだに崩壊したプロレタリア文化運動の様相をあとづけながら、その転換点となった文献に目を通している部分である。この日記は、いくつかの例外を除いて事実を断片的に記述したものだと先述したが、その例外は、この「転向」直後の記述、妻との関係や運動解体期のあとづけの部分などに見られる。出獄直後に中野は、獄中にいた時期の空白をとりもどすかのように、運動解体期の状況を確認しようとしているのである。なお、中野重治は、一九三二年四月に逮捕され、三四年五月に出獄するまで、約二年ほどの期間、豊多摩刑務所に収容されていた。

四　プロレタリア文化運動解体過程のあとづけと検証

まず、五月二十八日「この二日ばかりの中に「プロ文」「プロ文化」その他をザッと見る。（小林のこと）」と書かれている記事、すなわちナルプ（日本プロレタリア作家同盟）発行の文芸機関誌「プロレタリア文学」とコップ（日本プロレタリア文化連盟）発行の文化運動機関誌「プロレタリア文化」を読む記述に注目したい。「小林のこと」とあるのは、一九三三年二月二十日に虐殺された小林多喜二のことと思われるが、中野はこの虐殺のことを、その三日後に、差し入れにきた妻からすでに聞いて知っていた。「プロレタリア文学」一九三三年四月・五月合併号と「プロレタリア文化」一九三三年三月号には、この小林多喜二虐殺についての特集記事や、多喜二の遺稿となった『右翼的偏向の諸問題』の最終稿が掲載されている。

六月一日には「マー公別居の話を持ち出す。俺が［］女に世話女房を求める傾きあり。また彼女自身世話女房になつてしまいそうな傾きあり。それでは芝居の仕事出来ず。俺が居なくて彼女一人の時は芝居の仕事うまく行く。そんなような話なり。俺はふさんせい。話そのままになる。」（［］は判読不可能の箇所）と書かれ、「転向」後において妻との関係が悪化している様子がうかがえる。別居したあとの六月十三日にも「停車場へ原を迎えに行く。行きちがいになつた。話。ギャップ——柱のくずれた感じ——大きいと思つていたものが急に小さくなつた感じ——「中野が出て来て原泉くさつてる」

とある新聞記者言つたという話。今後の生活について。立直りの一層の困難。自分はふつつかながら出来る限り正しく奮闘してきた、中野重治の女房だと人にも言われるし自分でもその点でも力づけられて生きて来た——」と、妻が夫の「転向」に衝撃を受けたことが記されている。

このように妻との関係がうまくいかない一方、プロレタリア文化運動のあとづけは、次のように続けられている。

六月二日
鹿地の書いたパンフレットをちよつとよむ。分らぬところだらけ。しかし彼の努力は分る。当時の彼の苦労察するに余りあり。

六月五日
[] の「日本プロレタリア文学運動方向テンカン []」というパンフレット読了す。分らぬところ、自 [] まちがいと思われる小さな点方々にあり。し [] これを書いた彼の努力——言いうべくんば苦チユウはやや分る如し。彼は最も割りの悪い苦しみをなめたようである。これは力作である。分らぬ所多いが、教えられるところの多々ある。全体としてはまだ分らぬ。(略)
中央公論九月号（徳永—創作方法の新テンカン）
改造十月号林—再出発

六月十一日
五月テーゼをすこしよむ。かしまをどうするか決着つかず。原と話す方がいいかとも思う。

六月十四日
「文学運動の新たなる段階のために」という鹿地のパンフレットを峰がくれた。
「新劇の危機」（村山—「新潮」七月号）はアセツテいる。具体的私案は出さぬ方がよかつた。その前提がもつと押し出されるべきだつた。まだ昔のクセが残つている。しかし出たのだから正しくすすめればいいだろう。

六月十七日
「文学運動の新たなる段階のために」読了。(略)
当 [] 化運動の指導部は運動から孤立していたものの如し。「指 [導] 部」という言葉がひつかかる。

六月二十六日
プロット解散の声明書。

六月二日にある「鹿地の書いたパンフレットをちよつとよむ」とあるのは、六月五日にその題名が見える鹿地亘の『日本プロレタリア文学運動方向転換のために』という、一九三四年二月にナルプ出版部から発行された論文である。この方針にそうかたちで、ナルプはこの三月に解散する。中野が出

獄するわずか二ヶ月前のことである。中野は「彼は最も割りの悪い苦しみをなめたようである。これは力作である。分らぬ所多いが、教えられるところの多々ある。全体としてはまだ分らぬ」と、留保つきながら評価しているが、このときナルプの責任者であった鹿地亘への評価は、そのままのちの『甲乙丙丁』のなかで「木っ端微塵にされかけている組織、それを何とかそこまでは持って行かせないで、せめてあとあとのために何かの接穂をなりと残したい。おぼつかないまでもこれだけは……というので奮闘していたのだったらしい」と繰り返されることになる。

もともとこの解散を導く契機になったのは、同じ六月五日の「中央公論九月号（徳永―創作方法の新テンカン）　改造十月号林―再出発」という記事の文章だった。これらは、ともに前年の一九三三年に発表された、徳永直の『創作方法上の新転換』という文章と林房雄の『プロレタリア文学の再出発』という文章を指している。徳永の文章は、蔵原惟人らナルプ指導部の政治主義を強く批判したもので、これが大きな契機となってナルプ解散へ進んだという経緯があり、林房雄の文章も同様の役割を果たした。ふたりの文章は、すでに逮捕されている蔵原や宮本ら指導者たちを批判することで、運動の方向転換をはかろうとしたものである。六月十七日の記事に「指導部は運動から孤立していたものの如し」とあるように、徳永の批判を一面で認めながらも、のちの『甲乙丙丁』では、批判に応えることのできない逮捕者への批判そのものが運動にとって有効ではなく、逮捕者に追い討ちをかけるかたちになっていたと振り返っている。

中野は、自分が獄中にいるあいだに、ナルプ解散となった事情を、このようにあとづけていたが、六月十一日には、日本の共産主義運動の大きな方向転換をもたらしたコミンテルンの三二テーゼを読み、さらに六月十四日に入手した鹿地亘の『文学運動の新たなる段階のために』というパンフレットも十七日に読んでいる。この『文学運動の新たなる段階のために』は、さきの『日本プロレタリア文学運動方向転換のために』にさきだつ文章であり、徳永や林の文章を受けて一九三三年十二月にナルプ出版部から発行されたもので、組織の機械主義の克服や運動の再強化を説いたものだった。

しかし、実際には、上述したように三四年三月にナルプは解散することになる。また、ナルプ解散に遅れること三ヶ月のプロット（演劇同盟）解散のことは六月二十六日に出てくるが、そのプロット解散を呼びかけた村山知義『新劇の危機』（一九三四年七月号「新潮」）を六月十四日に読み、「アセツテいる」と危惧を表している。しかし結局、ナルプやプロットおよびヤップ（美術家同盟）などの解散、ＰＭ（音楽同盟）やプロキノ（映画同盟）やプロフォト（写真同盟）などの自然消滅によって、コップはこの一九三四年には事実上解体し、プロレタリア文化運動は終息を迎えることになるのである。

五　プロレタリア文化運動への継続する意識

「転向」して出てきてみると、組織は解散し運動も解体しつつあるという状況だったにもかかわらず、以上の日記記述を見ると、中野は解散解体へと至るあとづけをおこない、その過程を検証していたことがうかがえる。このことは、どのようなことを意味するのだろうか。のちに中野は『一九三六年度のプロ文学展望』（一九三六年一月三日「三田新聞」）という文章で、次のように述べている。

私の遠眼鏡は小さい。レンズはかすり傷だらけだ。おまけに霧が深い。しかし多少は見えるだろ

う。

第一にプロレタリア文学そのものがもう一度問題になるだろう。プロレタリア藝術、もつとひろくプロレタリア文化といつてもいい。プロレタリア文学とは何かということがもう一度問題になるのだ。つまり革命文学とそれとの関係の問題だ。このことは前に一度問題になつた。一度以上問題になつたろうが、私の直接知つてるところでは三一年から三二年へかけて問題になつた。当時の日本プロレタリア作家同盟、その団体の名まえを変えねばならぬのではないかという問題にまでなつた。しかしこれは十分論じられきらずにすんだように思う。それがもう一度問題になるだろうと思う。もつとも以前のような仕方では論じられないだろう。問題はもつと深められるだろう。具体的に作家および作品についてろんじられるだろう。進歩的ということ、また同伴者的ということも（このことは三五年ちゆう問題になりかけたが）はつきりしてくるだろう。

第二に文学者の団体組織の問題が進められるだろう。私は旧作家同盟の再組織ということを言つているのではない。私一個としていえば、この再組織ということはいま問題にならぬ。またそれはまちがいでもあると思うが、それについてはひと口にはいえない。私のいうのは作家たちのいろんな組織が出来てくるだろうということだ。サンチョ・クラブという組合も出来た。今度は大きな独立作家クラブが出来た。このクラブは作家のひろい、ゆるやかな親睦組織だ。

引用のように、「プロレタリア文学そのものがもう一度問題になるだろう」、「文学者の団体組織の問題が進められるだろう」と、中野は当時できていたサンチョ・クラブや独立作家クラブなどの文学者組織について語っている。このような文章を読む限り、中野はコップ解体ののちもプロレタリア文学やプロレタリア文化運動の可能性を探っているように見受けられる。文学史のうえでは、一九三四年には終息したとされるプロレタリア文化運動は、たとえばこの中野重治のような作家にとっては、意識のうえでまだ継続中であり、模索の状態が続いていたものと考えられる。

一九三四年に終息したとされているプロレタリア文化運動、またそれと同時期の転向者続出という現象は、中野の「転向」出獄と重なって、中野研究においては、この「転向」出獄が大きな意識転換となり文学に対する認識の変化がもたらされたと言われてきているが、確かにそのような変化はあるにしても、プロレタリア文化運動への意識はいまだ継続中であったことが以上のことからうかがえる。

私の考えでは、中野のプロレタリア文学・文化運動に対する意識そのものの決定的な変化は、一九三七年十二月の執筆禁止の処置以降のことだろうと思われる。三七年十二月には、山川均・加藤勘十ら労農派などの四百人が逮捕された人民戦線第一次検挙事件があり、明けて三八年二月には、大内兵衛らの検挙された人民戦線第二次検挙事件が生じている。この人民戦線事件によって、戦前の社会主義運動は打撃を受け壊滅状態となり同年四月に国家総動員法公布となるのだが、この人民戦線事件とちょうど同じ時期に、戸坂潤や宮本百合子といっしょに中野重治は執筆禁止の処置を受けたのだった。中野の『汽車の罐焚き』までの作品とそれ以降の作品とにある種の断絶が見られるように、「転向」後も一九三七年までは、意識のうえでプロレタリア文化運動への模索は継続していたと捉えることができるだろう。

六 おわりに

中野重治の『敗戦前日記』は、脈絡を欠く断片的記述が中心となっているが、「転向」後の日記の記述には、自分がいないあいだに解散したナルプの組織解体を検証しながら、獄中にいた空白期間をとりもどし、その空白を埋めるかのような試みが見られる。それは、プロレタリア文化運動に対する中野の意識の継続をも意味していたことを確認してこの報告を終わりたい。